

## 石井十次氏の伝記

三年 河 西 孝 江

一、生い立ち及び少年時代 氏は慶応元年四月十日、宮崎県高鍋町に隣接した戸数約七百戸ばかりの上江村に生れた。氏は明治六年八才で藩の小学校に入學したが、同七年から九年にかけては、父万吉が宮崎県が置かれると共に県官に採用されたので、小学校の前身たる宮崎学校に転校した。父は高鍋藩では十五人扶持の徒十格ではあつたが、その才能が認められて検者御都合心得という副奉行にまで進んだのだから、県の土木方面の指導には最もよい人材であつた。石井十次氏が宮崎学校に通學している間に宮崎県は鹿児島県に合併になり、次いで十年の乱が起つて来た。彼が十三才のときであつた。十四才の時、晩翠学会で漢學を學び「皇室擁護、国家興隆」の精神に非

常に感服したといわれている。十五才の時海軍將校になるうと志し、上京したが、翌十三年脚氣のためやむなく退京、郷里で宮崎学校時代の友人と共に青年報國党を結成せんとした。その越意書の中に、「岩倉右府は北樺太を露國に渡し、南琉球を支那に奪はれんとす。斯の如き敢骨漢は以て國家の柱石となすに足らず、寧ろ斬つて以て斯の奸物を除くに如かず。」とあつた。これにより西郷の殘党とにられ、政治犯の嫌疑をうけて、拘留五十一日を受つた。あやまれる少年の愛國心であつたとはいへ、氏の全生涯を貫く情熱的男性的性格はその頃からすでにうかがわれた。

氏は又「実行」の人であつた。青天白日の身になるをまつて、居村の周囲にある幾千町歩の荒原を開墾し、國富に資せんとした。そうして「五指社」なる小団体を結成し、馬糞を拾つたり草を刈つたりして附近の百町原を開墾したと云う。

二、青年時代 明治十四年、十七才の夏の友人の妹内野昴子と結婚、父のすすめで内勤の書記巡查として宮崎警察署に就職した。しばらくして病氣となり、同郷の先輩で宮崎で開業している萩原百々平の診療をうけた。萩原は十八才の氏に聖書の話を聞かせ醫學をやるように熱心にすすめた。氏は大いに心を動かされ明治十五年岡山甲種医學校に入學した。

岡山に出るとすぐ天主教の信者となり、更に十七年、二十才の時、新教に転じ岡山キリスト教会に入つた。氏が新教に転ずるようになった一つの原因は天主教では祈禱文の朗誦を常に繰返してゐるのに比して、

ここでは自己の心情を告白して禱つていて活気のある事に心を動かされたためである。これは氏の性格からも当然と思われ。その時薬学科に通つていた親友、林源十郎も共に受洗し彼等の深い関係が結ばれるようになった。

氏は明治十九年、未だ岡山学校に勉強中英国に於ける有名な信仰家であり社会事業家であつた、プリストル孤児院長ジョージ・ミユラーが偶々我が国に來朝し、各地に於て信仰の生涯について講演したことがあつたが、其の話を聴くうち、同院長が五十七年の長きにわたつて、祈禱の力により一万の孤児を救済し、当時尙二千余の孤児を養育しつゝあることを知つて、信仰の力の如何に偉大なるかと云うことに感激し、心ひそかに孤児救済の事業に自分の生涯を捧げようと決心した。其の年、氏は病を得たので療養のため県下の阿知村に仮寓することになつたが、ある時、附近の大師堂に於て一巡礼に会い、其の悲惨な身の上話を聞いて大いに同情し、遂に其の一子を救済することになつた。これが氏の孤児救済事業の端緒であると云う。

当時我が国は、明治維新以來、後進資本主義国としての成立期にあり、新政府は「産業資本の蓄積」のスローガンの下に「富国強兵策」を強行した。これに当然必要な莫大な国費は多く農村に求められ「地租改正」は形だけに過ぎず、高率の年貢は農村の窮乏化をもたらしつゝいたのである。一方政府の救貧政策は恤救規則を初めとして他の法も封建時代の慈善政策をつぐものに過ぎなかつたし、民間の事業もまことに低調であつた。

かくて氏を孤児救済事業に立ち上らせた要因は、当時の農村の狀態と実行力豊かなキリスト教信仰であつたと思われる。

三、氏の業績 (1)岡山孤児院設立 とうして氏の事業は一人の巡礼の子を救済してより初まり、明治十九年、岡山の三友禅寺を借受け、発起者をおつめて孤児教育会を組織した。以後一年有半は夫人や知友の協力を得て着々事業を進めると共に医学の勉強にもはげんでいたが、氏の胸には断乎たる決断を迫る一大問題があつた。即ち「人は二人の主に兼事する能はず。」で、医師となつて篤志事業として孤児院をやること

は氏には「お大名の社会事業」としか考えられないようになっていた。遂に明治二十二年一月十日、氏は六年間修業した医業を悉くやき棄てたのである。氏は当時の所感を左の如く記している。「……六ヶ年間學び得たる医業に石油を注ぎ火を放つて焼燼し、全身を孤児院事業に擲てり。之より衷心の苦悶なく、外友人の忠告止み、全力を天命の事業に傾注することを得るに至れり。此の時妻は泣き、友人は悲しみ、世人は発狂せしと評せしも、予は心中言うべからざる幸福を感じ。……若し此の一大決心なかりせば、或いは中途にして挫折したるやも計るべからず。……」ここにも氏の如何なる事も徹底しなければ止まない性格を窺うことが出来る。とうして設立した岡山孤児院は他のキリスト教徒を刺戟したのみならず、国民一般の関心を救済事業に向けることになつた。明治二十年代のキリスト教育事業はこれを契機として大いに発達し、新たに十一の育児施設が出来た。

我が国に於ける社会事業の発達は其の動機を主として客観的事象に置いているが、岡山孤児院のその後の発展もその例にもれ

ず、明治二十四年濃尾大震災には孤児九十三名となり、二十七、八年日露戦役中には百六十名に、又三十九年東北の大饑饉に際しては実に其の地方の孤児凡八百二十三名を收容し、一時はその收容児千二百人の大家族となつたのであつて、氏の逝去する大正三年一月迄の二十七年間に氏の手によつて育てられた教は二千八十九名に達した。

(2) 氏の教育 氏の孤児教育については「社会の劣敗者の遺伝をうけて逆境にもてあそばれた孤児は一代の教育ではだめで二代三代に至り初めて理想的な人格をつくることができる。」と云う。「三代教育主義」の下に宗教教育、実業教育、農業教育を行なつた。

④ 宗教教育 氏は事業を初めてまもなく同志社創立者新島襄に会つた時、新島に「孤児救済は困難な事業だからゆつくりお遣りなさい」と云われたのに答えて「先生は天下の英才を集めてキリスト教的に教育して下さい。私は天下の孤児を集めてキリスト教的に教育します。」といつたと云うことである。氏の教育は徹頭徹尾キリスト教信仰に基づく教育であつた。毎朝の集会

に、又聖書教育に非常な熱を持つていた。

⑤ 実業教育 明治三十六年の日誌に「予は第一の教は職業を知らしむるにあり、第二の教は真理を知らしむるにあり、第三の教は神を知らしむるにありと思ふ。…」とあるが氏の教育は又現実的であつたともいえる。即ち活版部、米搗部、機業部、理髪部、鍛冶部、大工部等殆ど全般に亘る実業の一社会を院内に設置し「自助」の精神を鼓吹奨励した。

⑥ 農業教育 氏はルソーの自然主義及び二宮尊徳の鉞鎌主義に深く感動し、劳作教育の基礎は農事にあると考へた。そこで茶臼原の開墾を行い、明治四十一年四月には男子部全部(百六人)年長女子(三十四人)計百四十人は主婦七人と共に茶臼原に移住した。当時の日誌に氏は次のように記している。「過去十七年の経験によつて、孤児を誘惑多き都会の最中にて養育するのと、天然界にて育てるの間に大なる差異を見るのであり特に多数は農業にて独立をさせる積りですから幼少の時から原野で育てることとは根本的に大切な事であると信じます。」氏の贖罪的福音的キリスト教とルソーの

反教会的な自然宗教観は一見矛盾する思想の如く見えるが、しかし氏の立つて居た時代の思想的地盤、氏が活動した社会的素地は、その本質に於て自由主義の生成期に属してゐた。そして一切の封建的な残存を脱脚するための苦闘は、その宗教に於てその思想に於て自由主義的なものへの特殊な感動をもたらししたのであつて、それは一つの時代思想であつた。

⑦ その他 氏の死後留岡幸助氏が評して「感化救済事業の中心とすべき大事な発見である。」としてゐる「満腹主義教育」や、集団的院内救助に対する「家族制」による分散的教育法は氏によつて着手せられた我が国近世社会事業の開拓的要素といえよう。

(3) 岡山孤児院の経営について 氏の孤児院経営の特色は祈禱主義と自動主義であつた。氏が最初に事業所とした三友禅寺の墓場を「岡山孤児院祈禱場」となし朝夕熱心に祈禱を捧げると共に「天は自から助くる者を助く」との自助の精神を培うために前述の実業部を開設した。明治二十七年日清戦争が始まると、氏は労働自動主義に拍車をかけ寄附金を謝絶して独立自活を決心

した。二十八年三月十日は実業的独立を確立した満一周年になるので三月九日に旧憲規の改正を行なつた。

#### 旧憲規維持法

「上天父の冥助を祈り天下有志の寄附金品を受けて敢て負債を消さす。」

#### 新憲規維持法

「天父の冥助と院内各自の労働とに由つて之を維持擴張し敢て寄附金品を受けず。」  
又明治二十八年の年報によればその日誌に次のような附言がある。「四月十三日所感、乞食主義を止めて労働主義を取るに至り、初めて心靈の自由を得心裏喜悅に溢れ何となく爽快を感じず。決心、來週より一同実業部の収入のみを以て生活することに定む。……所感、実業的独立をなさん、然らざれば死せん。これ吾人今日の大決心なり。」

しかし明治二十八年六月五日の日誌中に「漸く労働の基礎を定め、之より労働を以て独立の実を完うせんと欲すれば、万事意の如く進まず、胸中憤慨に堪えず。しかのみか泣き顔に蜂、妻は病床に臥して家庭變る。」とある。と云うのは同年の夏コレラ

が流行し氏を初め院内に数名の感染者を出し、二百六十余名の收容児は交通遮断されて飢餓に迫り、その上夫人は遂に永眠されたのである。そのためやむを得ず「天父の冥助と院内各自の労働と、天下有志の義捐金品とによつて維持擴張す。」と公告し、依然非借金主義を続けていた。その後明治三十九年の東北の大飢饉に際して收容児数は一躍千二百人に増大したため、遂に院價を起し、三万円の借財をせんとし、又後には再び非借金主義に返り、又一時百万円基金募集の広告をしたかと思えば忽ち非其金主義に變つたと云う。この行爲は氏の死後

「石井君は善と思えば即時に之を行い、悪と思えば今から直ぐ止める、即ち善と信じるとはその儘行、其の間には時間もなく空間もない。」と云う徳富蘇峯氏の評の通り、何事も徹底的妥協的なことは到底なし得なかつた氏の性格によると思われる。氏の岡山孤兒院経営の二十七年間はこのように苦難の連続であつたが、氏の持前の実行力と信仰によつて事業は力強く進んできたのである。こうして石井氏の没後もしばらく続いたが、急激なる社会の変遷は最

早このような孤兒院経営を許さなかつた。即ち第一次大戦中好況の波にのつて飛躍的な發展をとげた我が国資本主義は大戦の終了と共に増大せる生産力と縮少せる市場との矛盾により慢性的不況状態に見舞われたのである。こうして遂に大正十五年、氏の苦闘の結晶である院も解散せざるを得なくなつた。

#### 四、氏の晩年

こうして明治二十年より長い年月も其の使命のために捧げてきた氏は大正二年の末腎臓炎症の喘息にかかり、遂にこれが命取りとなつた。氏はその病が重く再起不能であることを知つて病床に小野田鈿彌氏をよんで聖書を朗読させた時「汝世にありては患難を受けん。然れど懼る勿れ、我れ既に世に勝てり。」と云う聖句を聞いて突然「我れ既に世に勝ち病苦は一掃された。」と叫ばれたと云う。其の後十一日の間生死の境を彷徨していたが、生前もう一度耕地を巡回すると云つて、腕車に乗つて附近を一巡し病室に帰ると歓喜して「すでに早や死にし此の身を救はれてこの月日を誰がためにせん。」とコレラに助かつた当時（明治二十八年）の述懐を

口吟し、又日頃の愛吟「鮎は瀬に住む、禽は樹に宿る人はなさけの下にすむ。」を高唱したという。こうして氏は大正三年一月三十日遂に昇天した。

五、むすび 明治二十七年七月十四日の日誌中に「予が生命のパンたる書籍は(1)聖書 (2)シヨージ・ミュレル氏信仰の生涯 (3)ブリス氏最暗黒の英国 (4)ルソーのエミール (5)徳富氏の国民の友。」とあり、又同年七月七日の日誌には「ミュラーの如く信じ、ルソーの如く教育し、ブリスの如くこれを行う。之れ予が天職なりと確信す。」と述べている様に、氏は豊かな宗教的情操的天分の人であつて、しかも実践的な人であつたが、学者タイプの人ではなかつた。従つて氏の思想には組織的表現はなく、彼の事業は即ち彼の思想であつたと云うことができる。彼の思想の基調はキリスト教信仰である。その信仰の特質は神に対する絶対的信頼と十字架の福音主義の信仰であると同時に、伝道的、戦闘的、社会的な「実行的キリスト教」の信仰であつた。従つて氏の孤児救済事業はこの信仰の実践であつた。

氏の孤児救済事業が及ぼした精神的社会的影響としては、  
(1) 小野田鉄彌の石井十次伝中山室軍兵序文

「近世の日本に於ける社会事業は、孤児教育から始まり、孤児教育は岡山孤児院が先駆をなしたものである。しかもその岡山孤児院を創立したものは石井十次君であるから、石井君が日本の社会事業に於ける位置は極めて重要なものであることがわかる。」とある様に近世社会事業の発展の一契機をなしたこと。

(2) 労働教育、家族制等、救済保護に於ける開拓をなしたこと。

等があげられるが更に重要なのは、当時の知識階級に与えた影響である。当時彼等に迎え入れられていた一つの大きな思想の流れは福沢等の「個人主義的巧利主義」であつたが、氏の岡山孤児院は、——後に社会問題研究所を開設した大原孫三郎の例のように——彼等の関心を新たに社会問題・社会事業に向けて喚起したのであつた。

だが他方、弱者のためには名誉も地位も金も生命も捧げて君に對する奉公を致すべ

き——を教えた様に氏の信仰は多分に儒教的色彩を持つたキリスト教であつて、慈善的要素が多く、近代社会に対する認識に欠けていたが故に、やがて社会状況の変化により個人の力では如何ともしがたくなり、遂に事業を閉じなければならなかつた点に問題が残される。

そしてここから今後の社会事業の方向が見出されつつあるのだと思う。

#### 参 考 文 献

- 一、信天記(石井十次詳伝) 西内天行著
- 二、石井十次の生涯と精神 西内天行著
- 三、日本キリスト教社会事業史 生江孝之著
- 四、日本キリスト教社会事業史 竹中勝男著